

- ▼ 『東方』 293号より  
一 李昂の新しい冒険——〈女〉と〈女たち〉をめぐる物語  
▲ 上野 千鶴子

『東方』 二九三号より

## 李昂の新しい冒険

——〈女<sup>わたし</sup>〉と〈女たち<sup>わたしたち</sup>〉をめぐる物語

上野 千鶴子(社会学者)

待ちかねた李昂の新作が、ようやく刊行された。中国文学者でもなく、中国語を読むこともできないわたしは、読者として、日本語訳の刊行を待つしかない。訳者の藤井省三さんから刊行を予告されて二年。訳業は難航し、予想以上に時間がかかったようだ。

脱稿した藤井さんから、歓びの声とともに、校正中のゲラが送られてきた。まだ訳文の用語法にも揺れがあった頃だ。新刊の帯の依頼だった。

アメリカ出張に持ち出し、往きのフライトの機内で一読、興奮さめやらぬ気分のなかで書いた帯の文章が以下のとおりである。再録しよう。

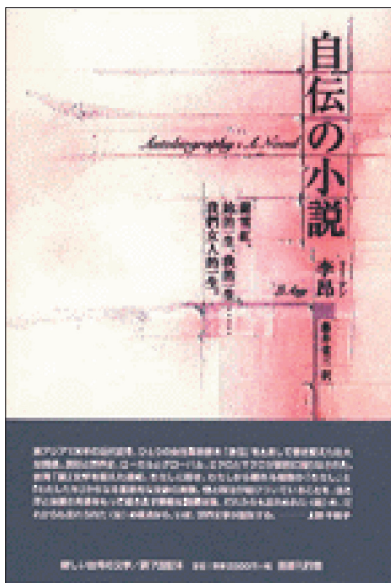
東アジア一〇〇年の近代史を、ひとりの女性革命家の「自伝」をとおして書き変えた壮大な挑戦。民俗と世界史、ローカルとグローバル、ミクロとマクロが緊密に織りなされた、台湾「国」文学を超えた達成。わたしに即き、わたしから離れる複数の「わたし」と「わたしたち」からなる重層的な文体の実験。性と政治とが結びついて、血と汗と体液の肉感をもって描き出す稀有な読書体験。だから忘れられた(島)の、だから忘れられた〈女〉の視点から、いま、世界文学が誕生する。

クリックすると次の段にジャンプします。

李昂著／藤井省三訳

『自伝の小説』

A5判・三五二頁・国書刊行会・二、九四〇円



おおげさだとも思いだろうか。今から読み返しても、過不足のない評だと自分でも思う。一〇年前に藤井さんの仕掛けて李昂と会って以来、何度かにわかる李昂との邂逅のたびに、折に触れ予告されていた本書の完成度は、わたしの予測をはるかに超えたものだった。折しも二〇〇四年度のノーベル文学賞の受賞者が、オーストリアの女性作家、イエリネクであることを知って、それなら、とわたしは思ったものだ、李昂だってノーベル賞に値する、と。

\*

わたしの書く書評は、李昂に未見の一読者の書くものと同じではない。というのも、一〇年前の初対面時から、彼女はわたしにこの作品の構想を語り、文体に腐心していることを洩らしたからだ「李・上野一九九三」。わたしは彼女と、「複数のわたし」と「文体のポリフォニー(多声性)」について語り、意気投合した経験がある。李昂はその後、主人公、謝雪紅の足跡をたどり、日本や中国本土への取材

の旅を重ねてきた。だが、たんなる評伝ではない本書は、謝雪紅の足跡や伝記的事実をいくらか取材したからといって、それだけで書けるものではない。わたしは李昂の、この一〇〇年前に生まれた女性革命家に対する深い同一化を知っていた。だが李昂は謝雪紅ではない。そして生きていく時代の背景や文脈もいちじるしくちがう。作品は、複数の時間と空間、複数のアイデンティティのあいだを往還し架橋する、ふくざつで細心の、文体の冒険になるはずだった。わたしの期待はいやましにふくらみ、翻訳の刊行を待ちかねていたのである。

\*

主人公、謝雪紅とは何者か、については、巻末について周到で目配りのよい訳者解説に委ねよう「藤井二〇〇四」。童養媳という奴隷売買同然のやりかたで婚家に買われた主人公が、長じて才覚と美貌を武器に、男を利用しながら、日本、台湾、中国、ロシアをまたにかけて戦争と冷戦のもとを生き抜き、共産党員として一時は共産中国に厚遇されながら、同志の中傷で失脚するという波瀾万丈の物語。そのなかには過酷な政治、権力闘争、植民地支配など、二〇世紀の国家と国際秩序に翻弄される個人の運命が書き込まれている。人物事典のなかではすでに過去の人として忘れられ、亡命共産主義者として故国台湾では冷遇され、スキャンダラスな女として汚名を被ったであろう謝雪紅を、その墓をあばいてゾンビを呼びだし、彼女に与えられた不名誉から救い出したのは、李昂そのひとだ。謝雪紅は李昂のこの作品のなかで彼女の人生を生き直し、李昂の作品によって新たな生命を与えられ、台湾にとっても、わたしたちにとっても忘れがたい女性のひとりになった。

もはや口のきけない死者をそのように「領有」する権利

▶ トップページにもどる

が誰にあるのか、と問うてもよい。フィクションにすぎない自分の小説を「自伝」と名のるのは大胆でもあり、かつ冒的な行為でもある。

李昂は「鬼」ということが好きだ。「鬼」は、存在の過剰さを抱えて、遺恨をのこしたままこの世にとどまる魂魄。政治的な不名誉を帯びて上海で客死した謝雪紅の「鬼」は、李昂に取り憑き、そして反対に李昂は謝雪紅に憑依する。小説というもののひとつとも幸福なありかたが、憑かれた者の語りだとしたら、李昂のこの作品には、その種の鬼気迫る憑依の趣きがある。そして作家が対象を領有 appropriation しているのではなく、対象が作家に取り憑いている possession（文字どおり、所有されている）状態は、書き手にとって恩寵というものだろう。

\*

だが、李昂は憑かれた語り部であるだけでなく、物語を隅々まで支配する冷徹なプロデューサーでもある。「自傳」の・小説 *Autobiography: a Novel* という自負に満ちたタイトルが、それを示している。この原題が、「自傳」と「小説」のふたつの漢語のあいだに、「の」という日本語を挟み込むことによって生じるノイズについては、すでに他のところで指摘した「上野二〇〇四」。英文タイトルを改めて見ると、*Novel* の含意がきわだつてくる。*Novel* の起源は、告白 confession だが、告白が虚構まみれであることはその成立の初めから自覚されていた。そして同時に新説 *Novel* でもあるノヴェルは、「新しく語られたもの」でもある。虚構を含む自伝を、新たに語り直す——それが本人でもない作家になぜ可能か、といえば、「謝雪紅はわたしだからだ」と李昂から答が返つてきそうな気がする。そして李昂自身と謝雪紅とのあいだの同一化と距離の双方を

統御するために、作家は周到な文体のコントロールを行っている。

おそらく試行錯誤を重ねたであろう本書の文体は、だが、その試行のあとをとどめなくらいに緻密で一貫した複合的な構成から成っている。成功の一端は、冒頭に登場する「三伯父」という狂言回しの登場であろう。謝雪紅と同時代人として設定され、台湾土着の陋習と保守の心情の代弁者であり、謝雪紅をスキャンダルのうちに葬り去った「多数派」のシンボルとしての「三伯父」は、文中、くりかえし登場して、ギリシヤ悲劇のコロスの役割をひとりで果たしている。

文中の「わたし」は、「三伯父」の姪として設定された鹿港生まれの女、李昂そのひとと思われる。だが文体は一人称から三人称へ、そして「わたし」は「わたしたち」へ、そして謝雪紅そのひとへ、と転変し、往還する。それに応じて、時間もまた、「三伯父」が語る「わたし」の子ども時代記憶、「三伯父」の語りの中の過去、それを生きた謝雪紅の「いま」、それを回想する「わたし」の時間、読み手を否応なしに招き寄せる「あなた」と「わたしたち」の現在、とフラッシュバックのように、輻輳し、重層する。その時間体験は、本文を読んでもらうほかない。

だがなかでも、「わたし」と「わたしたち」の「いま」を体感させる圧倒的な読書体験は、性にまつわる語りである。「性と政治が結びついていることを、血と汗と体液の肉感をもつて描き出す稀有な読書体験」と、わたしは帯の文章で書いた。李昂はスキャンダラスなセックス描写でつとに有名な作家だが、ここでは性は、物語の装置としてではなく、経験の語彙として、必然性をもって使われている。そのさわりを引用しよう。

トップページにもどる

「あんた……こないだ言ったじゃない、あんたのアレで教えてくれるって……」／彼女はそこで一息つくと、囁くように言った。／「字を覚えてくれる、って」／（中略）／男はとつくにピンツと遅しくなっていた一物を握って女に跨ると、胸元から高く突き出た乳房、そして細い腰にかけて、まさに大筆を揮って大書していった。／（中略）／アレがきめ細やかな肌を這うと少しくすぐったかったが、彼女はもはや笑いはいしなかった。／（中略）少しでも身動きしたら消えてしまうと怖れているかのよう、四肢を大きく開いたままである。／男は（中略）、一気に「愛」の字の最後の一画を書き終えると、恥毛の影にある小さな洞へと突き進んだが、挿入前に射精してしまった。／ウォーと男の喉から、感極まったと言わんばかりのうめき声が漏れた。

（本書、四九―五一頁）

謝雪紅が童養媳の境遇から拾い出してくれた男の妾となつて、神戸で商才を示す時期のエピソードである。文盲であった彼女は、この地で文字を覚え、宗主国の言語である日本語をも身につけ、モダンな洋装とミシン技術を身につけて故郷に帰る。その文字を学習するシーンが、鮮烈な性のイメージとともに刻印される。

言語とは何より支配の道具である。文盲であるとは、サバルタンの地位から離脱することができないことを意味する。女は自分の所有者であり支配者である男から、支配者の言語をカラダで盗む。女は言語に領有されるが、それと同時に、言語を通じて主体となる。現代思想の用語で語られてきたこのような主体と言語の機微を、セクシュアリ

ティのイメージネーションをつうじて、これほど鮮烈に体感させてくれる読書経験が、他にあるだろうか。

\*

もう一カ所引用しよう。

（あれほどの屈辱と不潔があろうか。／一番間の悪い時に来てしまい、しかも今回は下腹部の鈍痛はなく、微かな出血が下着の底を濡らすという前触れもなかった。来るなり、いきなり大量に湧き出し、真っ赤な血の中に暗紅色の血の塊まで混ざって……／（中略）／彼らはわざとあなたを立たせ、取り調べ官や拷問係の留置所係さらには記録係まで、出血が最も多い時のあなたを呼び出し、こうして彼らの前に立たせるのだ。／侮辱、全くの侮辱、そして——／不潔。／服や肌の上で乾いては濡れ幾重にも層を成した血は、生臭く腐敗した臭いを放ち、全身にまとわりつき、拷問により壊死した組織から発散される臭いよりもさらに耐え難いのは、やはり相手を求めて性交を願う臭いであるからだろう。

（本書、二〇六―七頁）

一九三〇年、謝雪紅が台湾共産党事件で日本警察に六カ月間にわたって勾留され、拷問を受けたときのシーンである。肉感と生理的な不快感が読者にまとわりつき、「あなた」と呼びかける一人称が、描写された経験への同一化を強要する。訳者の藤井さんは、訳業への嫌悪感を隠さない。男性ならなおのことであろう。

このシーンを訳文がよく写し取っているかどうかは、原文を読めないわたしにはわからない。だが、日本語訳による読書体験だけでも、クリステヴァのいうアブジェ

トップページにもどる

クション abjection（おぞましきもの）は体感できる。そして女であることは、こういうアブジェクションを生きることであることを、おしつけがましいまでに李昂は読者に経験させる。

ほんとうにこういう状況が日本警察の取り調べの最中にあったのかどうか、「史実」をめぐる、訳者の藤井さんはこの箇所を問題含みとして著者に問いたかった。詳細は藤井さん自身の報告「二〇〇四」を見てほしい。著者の答は、史実の如何は知らない、だが呂秀蓮の国民党下における拷問の経験がこうだった、と本人から聞いた、本文は想像力で描いたものだが、この程度のことは日本の警察もやっていただろう、というものだった。訳者はショックを受けたようだが、わたしの予想は、これでも最悪とは言えないだろうというもの。肉体に加えられた痛みは忘れることができる。だが、トラウマとして記憶に刻みつけられるのは、人格に加えられる侮辱と暴力だ。そのなかでも、セクシュアリティをめぐる侵害が、人格に対するもつとも大きな打撃になることを、加害者は知悉している。だからこそ、イラクのアブグレイブ刑務所における虐待は、性的暗喩のかたちを採るのだ。暴力もまた、それ自体ではなく、それを通じた人格の貶め humiliation が、逃れがたいトラウマとなる。

藤井さんの懸念が、誠実な歴史家としてのものか、それとも日本の名譽を配慮するナショナリスティックなものなのかは、わからない。まさか後者ではないと思うが、「史実」を超えて李昂のイメージネーションが読者に圧倒的に伝わるのは、これもまた政治と性との不可避の結びつきである。

\*

もうひとつ、セクシュアリティをめぐる、本書には密かな仕掛けが埋め込まれている。男の読者なら冗長にすぎ、女の読者なら耳をそばたてずにはすまない「梵塔那尼」というタイトルの、ふしぎな章がある。

「梵塔那尼」は「半陰陽」とも「二形」とも表現される漢語を、やまとことばの「ふたなり」という音韻に合わせて造った当て字。獄中孤闘の謝雪紅が、月の光の中で自慰をする場面を、全編散文詩と言ってよいような文体で描いた。文中「彼女」と呼ばれる見知らぬ女の身体感覚は、「わたし」そして「わたしたち」という文体の装置を通して、読者の身体経験へと密輸入される。

このなかには、性的異型としての半陰陽に関わることは出てこない。それより単独で二形、ひとりで十全、「わたし」が「わたし」を愛する女の自体愛 autoeroticism の快楽が詩的言語のなかで述べられる。この章を読んで、リウス・イリガライの『ひとつではない女の性』[Irigaray 一九八七]を思い出したのは、わたしだけだろうか。イリガライ「ふたつの唇」とは、もちろん女性性器の隠喩だ。ひとつでなくふたつの唇からなる女性性器は、互いに合わり、離れ、触れあうことによつて、おのずからなる快楽の源となる。そう、女の快楽にペニス是要らない、とレズビアン・イリガライはひそかなメッセージを送る。これを解剖学的な本質主義ととりちがえてはならない。性器の形状を問題にしているのではない。「女はひとりで完全だ」という言説遂行的なメッセージこそが実践されている。李昂がイリガライの読者であるかどうかはつまびらかにしないが、この章で、わたしたちは借り物でないことばで女の自己充足的な快楽を語る、中国語のイリガライを持ったことになる。

トップページにもどる

\*

本書は政治小説か？ しかり、まぎれもなく女の肉体を通じて書かれた政治小説である。読後、立ち上がってくるのは、忘れられた女性革命家、謝雪紅という個人の名誉回復だけではない。もうひとつ、冷戦後の世界新秩序のもとで急速に変貌した東アジアの小さな島、美麗島の運命でもある。大陸の唱える「ひとつの中国」というスローガンを、超大国、アメリカを初めとして西欧列強が是認した今日、「台湾人の台湾」という台湾独立のシナリオは、ますます道が険しくなった。「序」にあるように、本書が九一年に構想され、その完成に一〇年かかったという歴史の偶然は、本書にとつて幸運だったかもしれない。九一年は冷戦体制崩壊の年、それからの一〇年とは、米中接近のもとで、台湾が国際政治のなかで「忘れられた島」（存在してはならない島）となる一〇年だったからである。「だから忘れられた島」の、だからからも忘れられた、〈女〉の視点から、いま、世界文学が誕生する」と、わたしに帯に書いたのは、だから大げさではない。謝雪紅の運命に、李昂は国際政治に翻弄される台湾の運命を重ね合わせている。その意味で、李昂は一貫して、筋金入りの台湾本省人ナショナリストとしてメッセージを発信しつづけている。

蛇足ながらもひとつの問いを付け加えよう。本書はフェミニズム小説か？ 書き手がフェミニストを名づけているかどうかは、問題ではない。李昂自身は、フェミニストと呼ばれることには及び腰だし、また諸外国のフェミニスト読者との応酬のなかでは、李昂の作品の「フェミニズム性」に対する疑義も提出されている。だが、テキストがフェミニズムかどうかは、テキストを解読する読者が判定することだ。

本書の最後は次のような三行で締めくくられている。

謝雪紅、

あなたの生涯、わたしの生涯……

わたしたち女の生涯。

(本文、三三三頁)

同じ箇所は、この三行にインパクトを受けたであろう編集者の意図で、装丁の表紙に漢文のまま採用されている。編集者がこの三行を、本書の核心と読みとったように、このなかに本書の内容と形式のすべてが凝縮されている。それゆえ、わたしはこの小説を、フェミニズムの作品と断じることができる。というのも言語的な遂行性のもとで、「女(わたし)」「と女(わたし)たち」との想像上の同一化を達成するのが、フェミニズムという思想であるから。

\*

最後に翻訳者にして名伯楽でもある、藤井さんに感謝したい。『夫殺し』『李一九九三』以降の、彼の精力的な訳業がなければ、李昂という作家は、日本にこれほど知られることはなかっただろう。そしてまた、プロデューサーとしての彼は、異業種交流や異種格闘技から生まれる化学反応の、卓越した仕掛け人でもある。彼の差配がなければ、わたしは李昂と出会うことはなかったし、李昂文学にこれほど関わることもなかっただろう。李昂文学が「世界文学」になるためには、英語圏のフジイが不可欠だ。グローバルゼーションという名の英語支配のもとでは、英訳でなければ李昂の著作が(例えばノーベル賞の審査委員に)読まれることはないからだ。李昂が日本語圏で藤井省三を持ったのと同じ幸運を、英語圏でも持つことはあるだろうか。

▶ トップページにもどる

【文献】(abc順)

赤松美和子(二〇〇四)「李昂『自傳の小説』における語り」(『お茶の水女子大学中国文学会報』二三号、二〇〇四年四月)

藤井省三(一九九三)「解説 台湾のフェミニズム小説」

(『夫殺し』藤井省三訳、宝島社)

藤井省三(一九九七)「李昂の政治小説と女性政治家」

(『すばる』一九九七年十二月号)

藤井省三(二〇〇〇)「李昂『自伝の小説』：“周縁”台湾

のフェミニズム小説」(『創文』二〇〇〇年七月号)

藤井省三(二〇〇四a)「解説」(李昂『自伝の小説』藤井

省三訳、国書刊行会)

藤井省三(二〇〇四b)「台湾女性に対する『侮辱』にして不

潔な拷問」(『群像』二〇〇四年十二月号)

Irigaray, Luce, *Ce Sexe Qui N'en Est Pas Un*. 『こゝ

つではない女の性』(棚沢直子訳、勁草書房、一九八七年)

Spivak, Gayatri Chakravorty, *Can Subaltern*

*Speak?* 『『サバルタンは語ることが出来るか』(上村忠

男訳、みすず書房、一九九八年)

李昂(一九九三)『夫殺し』(藤井省三訳、宝島社)

李昂(一九九六)「色陽」(藤井省三訳、『世界文学のフロン

ティア二 愛のかたち』沼野充義他編、岩波書店)

李昂(一九九九)『迷いの園』(桜庭ゆみ子訳、国書刊行会)

李昂(二〇〇四)『自伝の小説』(藤井省三訳、国書刊行会)

李昂・上野千鶴子(一九九三)「徹底討論 李昂VS上野

千鶴子」(『宝島30』一九九三年六月号)

李昂・上野千鶴子(一九九九)「対談 女性についての快

楽戦略」(『世界』一九九七年七月号)

- ▼ 『東方』293号より
- 七 李昂の新しい冒険——〈女〉と〈女たち〉をめぐる物語
- ▲ 上野 千鶴子

上野千鶴子(一九九九) 「書評『迷いの園』」(『日本経済新聞』一九九九年四月一八日)  
上野千鶴子(二〇〇四) 「『単なるフェミニズム文学ではない』?——李昂文学に見るジェンダー・民族・歴史」(『中華モード』二〇〇四年三月、アトリエ・サード)

[トップページにもどる](#)